

NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

February 2026 vol.42



島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「森鷗外ゆかりの洋画家 小堀四郎」
芸術の本質を極めるために

企画展「カイ・フランク展 時代を超えるフィンランド・デザイン」
「フィンランドデザインの良心」と呼ばれる理由～暮らしに寄り添う無駄のないデザイン

企画展「加藤泉 何者かへの道」
名前のない「人がた」から見えるもの—加藤泉展を終えて

42



右から:小堀四郎《無限静寂(宵の明星一信)》/中:同《無限静寂(深夜の星一望)》/左:同《無限静寂(暁の星一愛)》 いずれも1977年 世田谷美術館蔵

「森鷗外ゆかりの洋画家 小堀四郎」

2026年4月25日(土)～6月15日(月)

休館日:毎週火曜日(5月5日、5月6日は開館)、5月7日 開館時間:9時30分～18時(展示室への入場は17時30分まで)

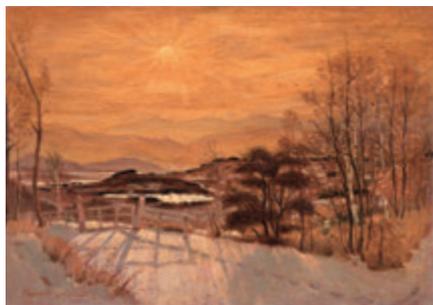


図1



図2



図3

図1.《高原の夕陽》 1947年 油彩・カンヴァス 豊田市美術館蔵

図2.《高原暮色(蓼科)》 1953年 油彩・カンヴァス 豊田市美術館蔵

図3.《宇曽利湖の懺悔(恐山)》 1967年 油彩・カンヴァス 世田谷美術館蔵

芸術の本質を極めるために

「人生の目的は名誉でも富でもない。両親を通じ神から授かった無限の能力を最高に引き出し、発揮することを人生の目標にしてほしい」

82歳の小堀四郎(1902-98)が生まれ故郷の名古屋で初の個展を開いた際、若い人に向けて語った言葉である。恩師、藤島武二の「画壇の悪風に染まるな。芸術は人なり」という教えを守り、生涯この会派にも属さず、画商とも交わらず、70年間黙々と絵を描き続けてきた画家が、人生を振り返って悟った真理であろう。

しかし、画壇と無縁で画業を続けるということは並大抵のことではない。戦後困窮した時には、疎開先の蓼科に一人残って農耕に従事。東京の家族に食糧を運ぶ生活が10年続いた。その合間にも四郎は絵を描き続けた。夕暮れ時、雪の残る蓼科高原に、柔らかな太陽の光が降り注ぐ瞬間を(図1)。そして、陽が沈む直前、ほんのひととき空に見られる緋色の一筋を(図2)。光と影を駆使する写実だからこそ表現することが出来る目の前の神秘と、万物を形成する神への感謝の気持ち。この頃の四郎の油彩画は、日々の暮らしの中で発見する感動を淡々と伝えており、孤独と向き合いながらも自然の美しさに魅せられていく様子が伝わってくる。

さらに1960年代から70年代にかけては、たびたび青森や東北を旅行し、自然観照だけでなく、そこに息づく人々の風習や信仰などにも焦点を当てていく(図3)。土地に根づく伝承や神秘的儀式を、旅人である四郎は少し俯瞰した位置から見つめている。かつて蓼科で芽生えた天体や自然への興味、その大空間を表現するための模索も続いた。1976年10月、74歳の時、知人の誘いで東京大学のイラク・イラン遺跡調査団の調査に同行。キャンプ地では、遮るものない砂漠の空に輝く深夜の星や暁の星に魅了されている。また、空港に降りる直前、上空には暗い青色のなか宵の明星が輝き、下界には夕やけが広がるという情景に遭遇する。一見ただ黒く、青く見える空の中に、無数の色の諧調が存在するさまを見た四郎は、それらの感動を三部作《無限静寂》(表紙)を描き上げることでも昇華させた。この絵は東京美術学校の学生時代、同期生たちと結成した上社会展に出品した。どの会にも属さない四郎が唯一、年に一度出品を続けてきた展覧会である。会場での大作を見た神父のたつたの希望で、長らくこの三点は築地にあるカトリック教会の聖堂の祭壇に掛けられていた。

こうした求道的とも言える画業の継続は、妻である小堀杏奴の理解と協力なしでは

成り立たない。四郎自身「絵を描いたのは自分だが、描かせたのは家内」と冒頭で紹介した82歳の初個展の折に答えている。戦後、生活が困窮するなか、知人に教師の職を紹介されるたびに妻は「絵をかくのに一番大事な日中の光線のある時間にお勤めしたらどうなりますか。くらしのことは何とでもなります」と言って、夫の画家としての生活を尊重し励ました。杏奴は、父の森鷗外から受け継いだ文才を生かして生涯随筆家として活躍している。絵筆とペン。持つ筆は異なるが、芸術を培う同志でもあった。

小堀四郎は、96年の生涯を通して名声を求めず、豊かな暮らしとは無縁なまま世を去ったが、芸術を介して物事の本質に向き合い、世俗の何ものにも囚われず、「絶筆が最高傑作と言われるように描き続けます」という言葉のとおり、日々黙々と進化し続ける努力を重ねた。それは本当の意味での人生の豊かさであり、画家としての本懐であったに違いない。情報化が進み、迷いの多い令和の時代を生きる私たちの目に、小堀四郎の芸術はどう映るだろうか。

*参考文献
・「小堀画伯が個展」日本経済新聞1985年5月15日
・「けさの顔 神を信じ写実一筋」中日新聞1985年5月12日

(左近充直美 当館専門学芸員)

「カイ・フランク展 時代を超えるフィンランド・デザイン」

2026年6月27日(土)～9月6日(日)

休館日:毎週火曜日(8月11日は開館) 開館時間:9時30分～18時(展示室への入場は17時30分まで)

企
画
展



A

A. アラビア製陶所でのカイ・フランク 1953年
Photo: Pietinen © Architecture & Design Museum Helsinki



B

B. カイ・フランク《キルタ(ギルド)》シリーズ 1953年 アラビア製陶所
Photo: Rauno Träskelin © Architecture & Design Museum Helsinki
C. 《ティーマ》シリーズ © Iittala



C

「フィンランドデザインの良心」と呼ばれる理由

～暮らしに寄り添う無駄のないデザイン

フィンランドを代表するデザイナー、カイ・フランク(Kaj Franck/図A)。「フィンランド・デザインの良心」とも言われるこのデザイナーの仕事、この夏包括的に紹介する。1950年代初頭にその前身となるシリーズが生み出され、現在も世界中で愛され続けている食器シリーズ「ティーマ(TEEMA)」(図C)成立の背景を紐解きながら、その精神に迫りたい。

カイ・フランクは1911年、ロシア帝国内のフィンランド大公国東南部にあるヴィープリ(Viipuri、現ロシア)という町に生まれた。ここはロシアとの国境にほど近いカレリアと呼ばれる地域にあり、フィンランド第2の都市として栄える文化都市だった。フランクは1929年から1932年の間、ヘルシンキの美術工芸中央学校(現アアルト大学)に学び、就職。仕事を始めた当初はインテリアやテキスタイルデザイン、ショップのウィンドウデザインなどに携わったという。1939年以降、政府の奨学金をいくつも得て、スウェーデン、デンマーク、ドイツ、イタリア、フランス、イギリスなどに遊学する。特にイタリアのガラス工場ですさまざまに研究を重ねた経験が、帰国後のキャリアへとつながっていった。1945年には前述の母校に教授として着任、また同年アラビア製陶所のデザイナーとなり(翌年から主任、1961年まで)、1950年には

同じバルチラ社の傘下となったヌータヤルヴィ・ガラス製作所にも勤めた(翌年から主任)。1946年にはイッタラ・ガラス製作所のデザイン・コンペティションで二等と三等を受賞し、イッタラでの仕事も並行して始める。

フランクが成長し、デザイナーとして歩みを進める中、フィンランドは政治的に不安定な状況が相次いだ。1917年、ロシア革命によりロシア帝国が崩壊するとそれに伴って国として独立。しかし1918年には国内で内戦が勃発。1939年からは「冬戦争」と呼ばれるロシアとの戦闘、続く「継続戦争」を経て、ロシアへカレリア地方の割譲を余儀なくされる。これによりフランクは故郷を失った。フィンランドは国土全体の1割、工場生産高の2割を失い、42万人が住む場所を追われて難民化した。戦後は住宅不足が深刻な課題となり、破壊された施設や新たな工業施設の建設と並行してコンパクトな集合住宅の建設が国土で進められた。

こうした中で生み出されたのが、「ティーマ」の前身となった食器シリーズ「キルタ(KILTA)」(図B)である。フランクは、アラビア製陶所に入るとすぐに幾何学的な形の展開、積み重ねやすさや量産可能性などを模索した。パン皿、スープ皿など用途別に一式揃えるそれまでのテーブルウェアの考え

から離れ、狭い集合住宅のキッチンでも場所を取らず、経済的な負担も最小限にでき、美しさのあるものの必要性を感じたのだ。研究の上に生み出された「キルタ」は、様々な用途に使用して組み合わせ自在なシンプルな形状で構成され、丈夫で安価、必要な数だけを購入してダメになればまた必要数買い足すことのできる単品販売を基本とした。唯一の装飾は色彩のみとし、1953年の発売当初は白・黒・茶・緑・黄の5色のみで構成された。このように「キルタ」は、戦後困窮していたフィンランドの人々の暮らしにデザインの力で寄り添おうとするフランクの姿勢が総合的に表現されたものと見ることができる。

1953年の発表以降、「キルタ」には様々なアイテムが加わり、それぞれが少しずつブラッシュアップされながら充実してゆき、フィンランドの多くの家庭に受け入れられたという。1974年には使用する素材の終了に伴い生産も一旦終了。その後1980年に陶器から磁器へと素材を変更し、各アイテムのデザインもさらに修正して、「ティーマ」として改めて発表された。今日では同じグループ会社となったイッタラに製造が移され、豊富になったカラーバリエーションによって世界中の食卓を彩っている。

(廣田理紗 当館専門学芸員)

名前のない「人がた」から見えるもの —加藤泉展を終えて

昨年夏に開催した島根県安来市出身のアーティスト、加藤泉の個展では、高校時代から最新作まで38年の間に制作された200点以上を一挙公開した。加藤は学生時代から絵を描き続けるかたわら、木や石やソフトビニールを用いた彫刻、刺繍やドローイングを施した布の作品、さらに近年では石版画や浮世絵、彫刻にプラモデルを組み合わせた作品なども手がける。展覧会ではこうした多様な表現を余すことなく紹介した。

加藤は一貫して「人がた」とよばれる人のかたちを制作してきたが、それらは写実的な人体ではなく、特定の人物や情景を示すものでもない。人のかたちを使いながら、手を動かして出力する表現そのものを常に世に問うている。その姿勢は作品の題名にも反映されており、2001年以降のほとんどの作品名は《無題／Untitled》となっている。題名がないことに戸惑う観客もいるが、作品に付随する概念的な情報が少ないおかげで鑑賞者は視覚情報に集中することができ、自分の目でとらえたものから自由に想像をめぐらせることができる。

約2ヶ月の会期中、一部に「私には理解が難しかった」という声があったものの、5,600人を超える老若男女が加藤の豊かな表現を楽しんだ。来場者アンケートに書かれた「鑑賞後、幸福感や将来に向けて

のエネルギーを体感しました(男性・80歳以上)」「みたことのない絵ばかりで感じたことのないことを感じれた(女性・10代)」といった感想や、小さな子どもが展示室で興奮する姿から、加藤がインタビューで語った「究極的には自然のようなものを描きたい」という目標に近づいていることを確信した。加藤の作品が私たちの心をとらえる理由については、展覧会図録所収の石倉敏明氏の論考をぜひ参照されたい*。

初めて見る人が、例えば花や月といった自然に接するように感応できる魅力がある一方、加藤の作品には活動を追い続ける、あるいは回顧展や画集で制作の遍歴をたどることで能動的に発見できる面白さもある。例えば年代ごとに色調やタッチがどう変化したかを追ったり、木と石の作品における共通点や相違点を考えたり、というように。これらの比較はモチーフが人がたに固定されているからこそ容易にできるものである。ある表現の変奏が別の作品に出現する例はキャリアの長い作家にはしばしば見られるものだが、加藤の場合は表現の落差や、人がたという主題の親しみやすさゆえ「こうきたか!」とか、「こんなのもアリなのか!」といった驚き(時には笑い)を伴うのも持ち味になっている。

ここで今年の個展でポスター等の広報ビジュアルに掲げた2024年の油絵(図A)を

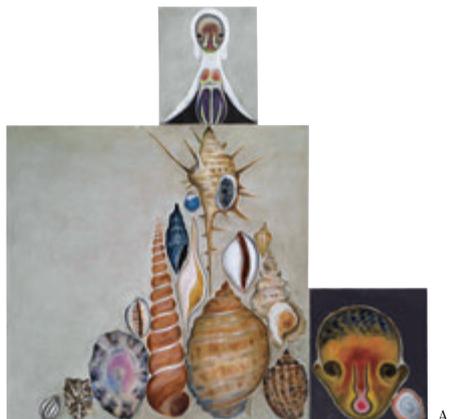
見てみよう。大きさの異なる3つのキャンバスの合体、しかも人以外の生物を写実的に描いた絵の導入は初めての試みで、新境地ともいえる一点である。ただ、絵画以外の作品に目を向ければ2020年以降、人がたの彫刻に動物のプラモデルをつけた作品(図B)や、人がたと海の生き物が戯れるリグラフなどが制作されている。また、パズルのように組み合わせられた貝の図は、人がたを積み上げる彫刻(図C)を想起させる。つまりこの作品は突然に生まれたのではなく、キャンバスの外で行われた様々な試みが絵画の中に還流してきたものだといえる。

加藤は、画家としてキャンバスに向かい「絵とは何か?」という探求を続けると同時に、画面の外側、つまり自分が身を置く三次元世界の中でも様々な形態の人がたを作ってきた。木を彫って人がたにすること。彫刻にプラモデルを乗せること。それらは1つ1つが作品であると同時に、壮大な実験のステップにもなってきたのだ。そのことを頭の片隅に置いて見ると、加藤の絵を見る愉しみが、いっそう増してくる。

当館での個展終了後、国際芸術祭「あいち2025」などで発表した新作では、さらなる展開が見られた。2026年にはどんな作品が現れるのか、楽しみにしている。今年の個展が加藤泉との初めての出会いとなった方々とも一緒に、地元島根の作家として引き続き注目していきたい。

*石倉敏明「境界線上の魂—加藤泉の作品世界について」『加藤泉 何者かへの道』合同会社くま出版、2025年

(川西由里 当館専門学芸員)



- A. 《無題》 2024年
撮影:岡野圭
© 2024 Izumi Kato
- B. 《無題》 2022年
撮影:岡野圭
© 2022 Izumi Kato
- C. 《無題》 2007年
撮影:岡野圭
© 2007 Izumi Kato